



絆～ほんとうに大
切なもの⑦



<パブー版>

比良岡美紀
(2005、2007、2012)

目次

皆様へ	1
(33)	1
(34)	3
(35)	4
(36)	6
(37)	7
(38)	9
(39)	10
終わりに	12
奥付	
奥付	14

皆様へ

絆～ほんとうに大切なもの パブー版。この⑦で最後となります。
大切なものが何なのか、俊彦もようやく気づきます。

本編のあとの「終わりに」も、あわせてご覧いただければ幸いです。

どうぞよろしく願いいたします。

⑥はこちらから

①はこちらから

<https://puboo.jp/book/43673>

(3 3)

俺は馬鹿だ、大馬鹿だ。本を読む理恵と向かい合い、俊彦は心底そう思った。だが同時に、馬鹿な自分を心配してくれる人間がいることを、ありがたいと思っていた。

「松平さん」

「なあに、原田君」

理恵は本から目を離さない。

「松平さんは、結婚してよかったと思ったことはある？」

「ええ？ 何、いきなりどうしたの？」

理恵はびっくりして顔を上げた。

「いや何となく、どうなのかなと思ってさ」

あらためて俊彦の顔をじっと見ると、理恵は言った。

「そうねえ、最近はそう思うようになったかな」

「最近？」

「うん。正直、あたしはすごく扱いづらいと思うの。メンドクサイ人、って言うのかな。だから、一緒にいてくれるダンナには感謝してる」

「そうなんだ……」

「原田君はどうなの？」

「俺？ いや、俺は……」

俊彦は頭をかいた。

「よかったと思ったことはないなあ。なんで結婚したんだろう、って思うばかりで」

「まあ、でも、この人でよかったって思える瞬間はあるはずよ。普段気づいていないだけじゃない？」

「そうかもしれないな。何せ俺、家のことも、子供のことも任せっぱなしだから」

「それはよくないわ。あなたも家族の一員なんだから、少しは関わったほうがいいわよ」

「……そうだよ、家族の一員。なんだか、俺は家族じゃないみたいな気がしてた」

「まあひどい。そんなこと言ったら、奥さん泣いちゃうわよ」

「泣いちゃうか、そりやまずいな、ははは」

こんな風に気軽に女性と話したのはいつ以来だろう。俊彦は記憶をたぐった。そうだ、ミチルとデートを重ねているときに、すごく話しやすいと思ったんだ。ミチルも俺には何でも話せると言ってくれた。お互い、何でも気軽に話せる夫婦になりたいって、そう思って結婚したんじゃないか――。

(3 4)

結婚当初のころの出来事が昨日のここのように、鮮明によみがえってくる。

――ミチルが変わったんじゃない、俺が変わったんだ。何でも話せる人と結婚したのに、俺が何でも聞いてやるって言ったのに、何も話さず、何も聞いていなかった……。

理恵との会話もそこそこに俊彦は立ち上がり、会計を済ませると、上着を抱えて店を出ようとした。だが大事なものを忘れている。理恵はくすつと笑いながら、俊彦の忘れ物を手に取った。

「原田君、カバン忘れてるわよ」

俊彦はあわてて戻り、カバンを受け取った。

「ごめん、ありがとう」

「どういたしまして。あわてて転ばないようにね」

俊彦はニコッと笑うと、ドアを開けて出て行った。

窓ガラス越しに俊彦の後ろ姿を見送りながら、理恵はつぶやいた。

「やれやれ、一件、じゃなかった、二件落着か」

そして椅子の背にもたれかかり、大きく伸びをした。うーん、と声を出し、マスターに声をかける。

「マスター、あたし今、とっても乾杯したい気分なの。付き合ってくれない？」

俊彦は家路を急いだ。今日は剛一の模擬面接だと言っていた。もう終わっただろうか。何時に帰るか聞いておけばよかった。いや、メモを残しておくべきだったか。早くミチルに会いたい。信号待ちをしながら、俊彦はかつて経験したことがないほどの高揚感をおぼえた。この信号を渡ったらすぐだ。早く青になれ――。

「ただいま」

息を弾ませ、俊彦はドアを開けた。家の中は、しんと静まりかえっている。ミチルがいるときは、おかえりなさいと声がして、スリッパのパタパタいう音が聞こえるのが常だった。

「留守か」

そうつぶやくと、俊彦は玄関の上がりかまちに腰をおろした。そのとき、ミチルの声があった。

(3 5)

「早かったのね。同窓会じゃなかったの？」

俊彦は驚いた。なぜ、そのことを？

「え、あ、ああ。同窓会、だけど、俺、話したっけか」

「話さなくたって分かります。案内状、鏡台に置きっぱなしだったわよ」

「あ、ああ、そうか。すまない」

「別にいいですけど」

変な人、とつぶやいて、ミチルは玄関からダイニングテーブルに移動した。

俊彦も、ミチルと向かい合うようにダイニングテーブルについた。

「あなた、お茶は？」

「うん、いただくよ」

「今日は暖かったですね」

「そうだな.....剛一は、どうしてる？」

「外で遊んでいます。さっきお友達が迎えに来て。夕飯までには戻るように言ったけど、今日は遅いかもしれないわ」

「何かあったのか？」

ミチルはため息をついて俊彦の顔をじっと見た。

「私が悪いって、あなたは言うでしょうけど」

「お前が悪いって？」

「あなたいつも言うじゃない、俺は子供の面倒まで見られないんだって」

俊彦は頭をかいた。理恵と話したあとでは、自分の言動に恥じ入るばかりだ。

「そうだったな。すまない。俺もこれからは、もう少し剛一のことを考えるよ」

それを聞いたミチルは、信じられないという顔をした。

「何かあったの？」

「何もないよ。本当にすまないと思った、それだけだ。それより剛一のこと、話してくれないか」

ミチルはうなずいて、ゆっくりと話し始めた。

剛一は昨夜から元気がなかったが、緊張しているのだろうと思い、それほど気にしていなかった。しかし会場へ着いても上の空で、見かねた塾長に注意される始末。

「模擬面接といえども、そんなことでは通りませんよ」

周囲からクスクスと笑い声が漏れ、顔から火が出るほど恥ずかしかった、とミチルは言った。

(3 6)

模擬面接を受けたものの、判定は「不合格」。やる気がないなら来なくていい、とまで言われてしまった。帰ってからもボーっとしている剛一を、ミチルは強い口調で聞いた。顔を上げた剛一は、目に涙をためていた。

「僕、私立なんか行きたくない。卓磨くんと同じ中学に行って、サッカークラブもずっと続けたい。ねえ、お母さん。一生のお願いだよ」

なぜ？ これまでそんなこと一度も言わなかったのに――。私立の中学に行かなければ、お父さんよりいい大学に入れないし、お父さんよりいい会社に就職できないのよ。混乱したミチルはとっさにそう言ってしまった。

「お父さんの悪口言わないで！」

「悪口なんて――」

「悪口じゃないか！ 僕はただサッカーがしたいだけなのに、それがなんでいけないんだよ！？」

ミチルは何も言えなかった。そのとき、玄関のチャイムが鳴った。

「卓磨くんだ！ サッカーしに行ってくる」

そう言うと、Tシャツの袖で涙をぬぐい、剛一は出て行った。

「夕ご飯までには帰るのよ！」返事はなかった。

すべて話し終え、ミチルは大きくため息をついた。俊彦は何かを考えていたが、しばらくして口を開いた。

「剛一の好きにさせてやろう」

「でも、あなたも賛成したじゃない。私立に行かせようって」

「そうだけど、無理に行かせることもないだろう。高校から受けられる私立だってあるし」

「それは、そうですけど……」

「俺たちにできるのは、剛一が一人で生きていけるようにすることだ。そうだろう？」

「え、ええ」

「剛一は、ミチルに逆らった。とても勇気の要ることだ。それまではい、はい、と言うことを聞いてきたのに、急に反抗する。だが急じゃない、十分に考え抜いたことなんだ。剛一は、大人への一歩を踏み出したんだよ」

俊彦はお茶をひと口飲み、さらに続けた。

(3 7)

「祝福する意味でも、好きにさせてやろう。サッカーを続けたいなら、勉強と両立させろと言えばいい。途中で投げ出したり、怠けたりしたら叱ればいい。最後までやり遂げさせる方が、剛一のためになるんじゃないかな」

ミチルはじっと聞いていたが、急に下を向いて泣き出した。

「おい、どうしたんだ。ミチル。責めてるわけじゃないんだぞ」

なだめる俊彦に、ミチルはかすれた声で言った。

「違うの。話を聞いて、一緒に考えてくれたことが嬉しいの。私ずっと、いい母親にならなくちゃって思ってた。あなたの手をわずらわせちゃいけないって……」

こみ上げる嗚咽をこらえ、ミチルは言葉を続ける。

「それに、同窓会のこともあったし」

「同窓会？」

ミチルは小さくうなずいた。

「案内状、鏡台の上に置きっぱなしにしたじゃない？ あれを見て、いつ話してくれるんだろうって思ってたの。でも、話してくれなかった。それに案内が来てから、あなた、何だかうきうきしてた。私の知らない誰かとの再会を楽しみにしてる、そう思って悲しかった」

自分の心情を言い当てられ、俊彦は冷や汗をかいた。

「結婚してからずっと、あなたの大切な人は私、そう思ってた。でも、本当は違ったのかもしれないって、……そんな気がしたの」

「そんなことは――」

「最後まで言わせて。お願い」

俊彦は黙ってうなずいた。

「だから余計に、頑張らなきゃって思ったの。剛一を私立中学に行かせなくちゃ、って。でもそれが、剛一には重荷だったのね……」

二人の間に沈黙が流れる。しばらくして俊彦が言った。

「すまん。たしかに俺は浮かれてた。息苦しかったんだ。君が剛一の受験に夢中になるほど、居場所がなくなる気がして逃げたかった」

ミチルの目から、大粒の涙があふれる。

「でも逃げて、行き着くのはやっぱりここなんだ。俺にとって安らげる場所は、君と剛一のいるこの家なんだよ。同窓会に行くと、やっと分かった。本当にすまなかった。君

のことを一生大切に作るから、だから、これからも一緒にいてくれ。頼む」

(3 8)

頭を下げる俊彦の前で、ミチルは大声を上げて泣いた。泣きながら話そうとしたが、しゃくりあげているので声にならない。かろうじてこれだけが俊彦の耳に届いた。

「あなた……あなた……」

俊彦は泣きじゃくるミチルをしっかりと抱きしめた。

「大丈夫だから、俺が守ってやるから。心配するな。なあミチル。剛一は強い子だ。お前がちゃんと育てたんだ。だから心配するな。みんなうまく行く。俺たち三人力をあわせれば、できないことなんてない。そうだろう？ 今までそれで乗り切ってきたじゃないか。だからこれからも頑張ろう。な。」

自分の腕の中で泣きながら、うん、うん、とうなずくミチルを見て、俊彦は胸が締め付けられた。

本当に大切なのは目に見えない――。突然、剛一に言われた小説の一節がよみがえる。

本当だよな。俺が見ていなかったものが、いちばん大切なものだったんだ。これからは、決して目を離さないよ――。俊彦はミチルの額に、そっと口づけをした。

*** **

同窓会の二年後、俊彦は転職した。収入は三割減ったが、繰上げ返済で借金も減ったので、思い切って決断したのだ。そして朝の風景ががらっと変わった。ドアを開けて最初に出てくるのは剛一。その次が俊彦。最後にミチルが出てきて、二人を見送る。

通勤時間が短くなったので、俊彦は毎朝、剛一と一緒に家を出られるようになった。地元の中学校は駅へ行く途中の、角を曲がったところにある。剛一と別れるまでの数分、「男同士」の話をするのが一番の楽しみだった。子供の成長を、間近に見られるのはいいも

んだ。俊彦は心からそう思っていた。

「もう、あれほど言ったのに、傘忘れてるじゃない！」

ミチルの声が響く。

「いっけねえ」剛一があわてて取りに戻る。

(3 9)

「はい、お父さんの傘」

「おお、すまん。ありがとう」

「いいってことよ」

「お父さんにそんな口のきき方しちゃダメでしょう！」

すかさずミチルの叱咤が飛ぶ。

「はあい」

「はあいじゃなくて、はい！ 何度も言わせないの。三者面談があるんでしょ、お知らせ見せなきゃだめよ」

「ええ、なんで知ってるの？」

「卓磨くんから聞きました」

「あいつ裏切りやがった」

「そんなこと言うもんじゃありません。まったく、私立中に行ってくれてたら受験の心配もなかったのにね」

「あー、またそれを言うー。言わないって言ったじゃないかー」

剛一はふくれっ面をしてみせるが、もちろん本当に怒っているわけではない。次の瞬間には三人とも噴出しているのだ。

「二人とも気をつけてね。剛一、まっすぐ帰るのよ」

「はい！ 分かってます」

剛一の様子に、俊彦もミチルも笑ってしまう。あれほどぎくしゃくしていたのがうそのような、幸せな家族の姿がそこにはあった。

駅に向かう道は、なだらかなのぼり坂だ。剛一の後ろを歩きながら、俊彦は言った。

「なあ剛一、好きな子いるのか？」

「なんだよいきなり～」

「お父さんもお前くらいのころ、好きな子がいたからな。どうなんだ？」

「それは個人情報だよ、お父さん」

「個人情報？ なんだそりゃ」

途中、剛一の後ろから右隣へと移動した俊彦は、前方から来た女性とすれ違いざま、肩がぶつかってしまった。

「失礼」と一瞬女性に目をやったが、すぐに前を向き、剛一と並んで、まっすぐ歩いていった。途中、剛一が角を曲がり、俊彦はじゃあ、と声をかける。

二人の後ろ姿を見ていた女性は、向きなおり、ベビーカーに目を落とす。そして赤ん坊をあやしめながら、坂をくだり、俊彦たちと反対の方向へ去っていった。その顔には、安らかな微笑みが浮かんでいた。

おわり

終わりに

2012年の2月から公開を始めた『絆～ほんとうに大切なもの』。
パブー版はいかがだったでしょうか。

改変はしないようにと思っていたはずなのに、終わって見たらいろいろ手を加えていました。書き足したほうが意味が通ると思ったり、逆にここは削ったほうがいいと思ったり。そう思うと、やはり直さずにはいられなくて……。ウェブ連載していたときと、大筋では変わっていないのですが、お話の印象は変わったかもしれません。

ひとまずこれにて終了です。

3月中に掲載を終えることができよかったです。

今後、ひっそりと(?)修正を加えるかもしれませんが.....。

最後まで読んでくださり、どうもありがとうございました。

また別の作品でお目にかかるのを楽しみにしています。

2012年3月30日

比良岡美紀

奥付

奥付

絆～ほんとうに大切なもの パブー版⑦

<https://puboo.jp/book/47425>

著者：miki-hiraoka

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/miki-hiraoka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/47425>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/47425>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

絆〜ほんとうに大切なもの パプー版⑦

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
